

といえる。「四箇格言」を宣言しているのである。

この四箇格言について思うに、此の四箇は皆便宜に従つて語を立てたものであらう。ために無間才の破は亦互に相通するものである。即ち、開目鈔巻下に「禪宗無間」といい、箇御器鈔に「真言師無間」といい、開目鈔巻上に「天魔法然」といい、撰時鈔巻下に「念仏亡国」と云う語があるのをみても解ることである。では何故に日蓮が開宗後の伝道において、法然の念仏宗を極力排撃したかというならば、当時の仏教界の状況として法然寂後急速に上下の階級の間に広まった念仏は転換期の時代の混乱した人心の要求に応じて、その彌陀一仏の信仰は旧来の聖道門諸宗をして衰微の淵におとし入れ再起不可能なるかの感をいだかしめるものがあり、それとともに彼の郷里安房国東条の地頭才が念仏を支持していたために、そこで日蓮の唱題成仏の主張もまず才一に浄土宗の念仏を打倒することをさしおいて、当時の社会にうけ入れられる余地は無いと考へた結果であらう。

## 円戒の研究

——特に法然の念仏と戒に就いて——

北 村 弘

法然上人は久安六年（一一五〇）十八歳の時、叡山黒谷の慈眼房叡空の室に入り、円頓戒の伝受をされたことは「勅修御伝」「十六問記」及び「九巻伝」等により明らかである。而して法然上人は伝教大師以来才十代目の天台円戒の正統者とされ、戒徳の秀れた高僧として親しまれ皇室を始め、貴族庶民に至るまで多くの人々より帰依を受け、これらの人々に授戒された事は諸伝に記すところである。貴族の中で最も法然上人と関係の厚かつた人は九条兼実であり、彼の日記「玉葉」の中でも文治五年（一一八九）から建久八年（一一九七）頃までの記事に於ても実に七回に亘る授戒の行われた事が推察されるのである。その一例を挙げると、建久二年九月廿九日の条に次の如く記されている。

乙亥、此日、請法然房上人源空、中宮有御受戒事、先例如此上人、強不參貴所之由、有傾軋云々、是不知案内也、受戒者、是事不聊爾、以伝受人可為師、而近代、名僧等、一切不知戒律事、禅仁、忠尋等之時までは、名僧等、皆好授戒、自其以後都無此事、近代上人皆学此道、又有効驗、仍不顧傍難、所請用也

と記されてある。中宮とあるのは兼実の女、宜秋門院の事であつて法然上人は貴族出身でないために普通には参殿出来ないのを傍難をも顧みず召請されたと云うのは公が如何に法然上人に対して尊崇の深かつたかを知る事が出来るのである。

又彼の女房である北政所が病氣の時にも法然上人が参殿し戒を授けていられる。それらの点から考えると、九条兼実並びに一門の者は大乗円頓戒を授かる事が直接の目的ではなく、法然上人の授戒を病氣平癒の為の祈禱的な儀式と考えていた様である。

又法然門下の中でも上人より戒を伝受した人は了慧の

円戒譜によると弁阿、信空、湛空の三師が受戒した事になつており、珍養の広血脉には信空、澄空、源智の四師が伝戒されたと記されている。

以上の様に貴族、門人にも戒を授け、又上人自らも戒を保つていられたのであるが、選択集に於ては、

今且 翻对五種正行以明五種雜行也

と云つて次に

此外亦有布施持戒等無量之行皆可攝尽雜行

之言

と説いて、持戒の行を雜行と談じておられ、又同じく三章段に於ても布施、持戒を捨てゝ専称仏名を選取すべきであると述べていられる。その理由は称名念仏こそ彌陀が大悲を以て選取され、本願に誓われた行であり、持戒は往生行としては時機に相応しないものであると云う。しかし法然上人が熊谷入道に出されたと伝えられている消息文の中には、

持戒の行は、仏の本願にあらぬ行なれば、たへたらんにしたがひてたもたせ給べく候

と云い、又次いで

僧の作法は大小の戒律あり、しかりといへとも未法の僧これにしたがはず、源空これをいましむとも、たれの人がこれにしたがふへき、たゞ詮するところは念仏の相続するやうにあひはからふへし。往生の爲には念仏すてに正業也、このむねをまもりてあひはげむへきなり

とあつて一見して選択集とは矛盾する様に見える所がある。上人の考えによると選擇した戒は念仏の助業として往生の爲には出来る限り持てと勸めていられるのである。

即ち法然上人にとつて、念仏往生が才一義的なものであり、持戒法律及び學問等の念仏以外のものはすべて才二義的なものと考えられて、往生業としての念仏と諸行の間に明確な一線を引かれている。又一期物語には

此觀無量壽經若依天台宗意爾前教也。故成  
法花方便

と云い次いで、

然依淨土宗意者一切教行悉成念仏方便

念仏以外のものは、全て念仏の方便、助業とし、才二義的なものとされているのである。

然るに法然上人は上記した様に、皇族、貴族等にされた授戒は單なる祈禱的授戒ではなく即ち一向專念の念仏信仰に入れる爲に方便として授けられたものであつたと考え、選擇集に於て廢捨された持戒を未信の人に対しては方便とし、既信の人々には助業として化他のために取り上げられたものである。

## 止觀中心の五念門

熊 沢 清 隆

### 止觀中心の五念門

五念門とは世親の往生論の中に説かれている礼拝、讃嘆、作願、觀察、廻向の五門であり、これが何れの經論に基づいて説かれたものであるかは明らかでないが、往生論に従つてその内容を述べてみよう。

初に才一礼拝門は「身業礼拝阿彌陀如来応正遍知、爲生彼国意故。」と論に述べている様に身口意三業の一つ身業の行で、龍樹の易行品に「無量光明慧、